

馬 洋 書

草 沢

所長のひとこと

盛夏の候、皆様におかれましては益々ご清栄のこととお喜び申しあげます。お世話になります、所長の横山です。まさに「地球沸騰化」との言葉がぴったりなほど、今年も暑い夏になっています。6月、東京都心では30度以上の「真夏日」が過去最高を更新し、地球温暖化が進んでいることを実感させられます。6月から労働安全衛生規則が改正され、職場における熱中症対策が罰則付きで義務化されました。健康や命を守るために必要なことですが、抜本的な温暖化対策がなされない限り、対処療法しかありません。温暖化による気候変動は地球規模で取り組むべき問題です。日本として何ができるのか、世界に対してどのように働きかけるべきなのか、残された時間は多くありません。

さて本日、7月20日は、参院選の投開票日です。7月3日の公示日以降、各政党は各自選挙公約を掲げ参院選を戦つてきました。昨今の選挙では、SNSが結果に大きく影響を与えています。これを受け、新聞各社は選挙報道の在り方を模索しています。今までは、ある政党への偏りを恐れ、選挙期間中は公平に各政党の主張を掲載する傾向がありました。しかし、今回の参院選では、各党の公約を検証し批判すべき公約はしつかり批判しています。例えは、争点の一つになつてゐる「物価高対策」は与野党ともにバラマキか減税です。他の公約を見ても、先の地球温暖化対策など、将来に対し責任を果たさうという気概のある政党は見当たません。では、誰に投票すればよいのでしょうか。棄権か、白票か、選挙のたびに、「入れる候補者がいなくて投票に行かないから」なら、白票を投じた方が良い」といった評論を目にします。そもそも白票に意義はあるのでしょうか。6月20日は毎日新聞オピニオンで

松本正夫（埼玉大名誉教授）・橋本侑樹（渋谷区議）・岡田憲治（専修大教授）の3人の識者が「白票」に意義はあるか」を考察します。以下、記事の紹介です。

松本氏は2014年の衆院選で白票を投じたと言います。その行動の理由から白票の意義を考えます。

小選挙区では立候補者の一人に投票した。しかし、比例代表選挙は政党を選びきれず白票で投票した。当時、「政治学者が白票を投じるとは何事か」とあるベテラン記者に批判された。しかし、「悩むが選べる人の方がうらやましい。普通は悩むでしょ」と反論した。元々、日本の政党は比例代表に耐えられないという思いがある。理由は、候補者の選択権が政党側に預けられているからだ。はたして政党は、どうまで責任をもつて候補者リストを作成しているのだろうか。人気取りや、利害関係でリストを作つてはいいのか。そのプロセスが見えづらいため、ちゃんと仕事をしてくれるか信頼がおけない。また、一定数白票が存在することば、政治の側が有権者の関係を考え直すきっかけになると考えている。白票の多くは「よくわからないから入れようがない。だから白票」だ。政治の側がこのシグナルを拾えれば、よりわかりやすい選択肢を用意する可能性もある。白票を投じた選挙以降は、渋々ながら有効票を投じている。しかし、白票を投じた時より後味の悪さを感じている。選挙と向き合つるのは1回限りではない。その都度、ため息をつきながらどういう選択をするのか悩む。私たち主権者は、たとえ後味が悪くとも、それに耐え選択することを試されているのではないだろうか。

第29号

発行日： 2025年7月20日
発行所： 株式会社エヌワイケー
〒154-0012
世田谷区駒沢5-7-6
電話： 03-3704-8391
FAX： 03-3703-7121
発行人： 横山和俊

橋本氏は、候補者の視点で意義を尋ねます。

私は投票権を得て以来、選挙には欠かさず行つてゐる。そして白票を投じたことは一度もない。「(ひ)にも入れたくない」と思う選挙は過去にはあった。そういう時は、積極的に支持はしない。緊張感や多様性が生まれるのではないか、などいの視点で投票してきた。首長選挙のような定数1に対する白票はともかくとしても、私のような定数34で62人が立候補した渋谷区議選とでは白票の意味は違つ。これだけ大勢の中からでも「選べない」とこののは、政治に対する不信感と受け止められるを意味する。しかし、白票が影響力をもつては少ないだろう。なぜなら選挙には「勝てば官軍」的な色合ひが強いからだ。白票であつても、投票率が上がり当選者への信認を強める結果となれば、当選者を利するだけだ。白票以外にもさもあらわな無効票があるが、メディアが「(こ)の選挙区では白票がこれだけある」と大きく報じれば、各政党へのけん制になるかもしれない。ただ、選挙にはその時々で機運があるのも事実だ。「(ひ)つせ1票なんて」とこの時、「今回の選挙は面白いや。何か変わるかもしない」とこの時では雰囲気が違つ。機運によつて、人の行動は意外と変わるものだ。白票をなくすには、そういうことに期待するしかないのではないか。

岡田氏は、白票を投じる人の多くは政治的意思表明をする気持ちのある人だと理解しつつも、無意味な自己表現でしかないと明言します。

政治不信や絶望ゆえに、白票に抗議の思いを込める。白票はまさに切実で誠実な「自己表現」だ。しかし、選挙では「今までの政治で良くて」、という意思としてカウントされるだけだ。白票も棄権も沈黙も、すべて同じ。「現状に不満なし」の信任票とされてしまうのが政治の力学だ。日本人は小中高校の学校教育のせいで「問いには必ず正解がある。正答に到達するべきだ」という価値観を身体化してしまつてゐる。しかし、政治

には分かりやすい正答はない。分からなさに耐え、不完全な情報の中で選び、失敗してもまた選び直す。それが政治という人間の営みだ。応援したい候補者がないから白票、ところの人もいる。だから私は鼻をつまんででも、よつましな候補者の名前を書くだろう。純粋な気持ちを優先し白票を投じれば、最も応援したくない政治家を当選させるのに加担する、ところ「不純」な結果を招くのが選挙なのだ。議会の割近くを取つている政党は、実は20%程度の人々の支持でも政権になり得る、ところのが現行の選挙制度のルールだ。しかも「これは「声を上げた人たち」だけが参加できるゲーム。白票や棄権の人はゲームに加われない。政治的に判断し、投票しよう。よりましな候補者の名前を書いたら、当選させたくない候補者のライバル候補者の名前を書いたら。「白票たつて意味のこもった表現なんだ」なんて熱くて純粹な思いは、結局、投票率が下がることでほんと笑む者たれに利用されておしまいなのだ。

参院選の各党の公約を見ても、心底応援したい政党は私もありません。19世紀の米国の神学者、ジョーダンズ・フリーマン・クラークの言葉とされてゐる「政治屋(ポリティシャン)」は次の世代を考える。政治家(ステーシマン)は次の選挙を考える。政治家(ステーシマン)は次の世代を考える。はたして、候補者の中に政治家はいるのでしょうか。かくなる上は、少しでもましの方を議会に送り込むことを繰り返し良くしていきしかありません。また、政治家は有権者の鏡とも言われます。私たちの諦めが政治に現れてはいなくてはならない。近年の国政選挙の投票率は50%そこそこです。政権選択がない参院選は2回も50%を下回っています。私は岡田教授の意見に賛成です。今回も私は、棄権もせず、白票も投じず選挙を行つてきます。